新津東部コミ協だより

ミニかわら版

●令和5年3月15日号●

★新津東部★コミュニティ協議会
ー新津川でつながる新津第二小学校区ー
柄目木 金沢町 新町 日宝町 北上 草水町 滝谷町 滝谷本町 飯柳
新津川

秋葉区ひな・お宝めぐりが開催されました。

秋葉区自治協議会提案事業「秋葉区ひな・お宝めぐり」が、二月一日より開催されました。

秋葉区自治協議会と秋葉区の十一コミュニティ協議会が協働で行うもので、新津東部コミュニティ協議会は、中央、西部、満日、東部、阿賀浦コミ協の合同展示で、昨年に続き、「つるし飾り」の展示を担当しました。

地域内の保育園や幼稚園、小中高等学校、福祉施設、企業、地域の茶の間などの皆さんが、折り紙で作った、心温まる素敵な「つるし飾り」が、新津地域交流センターに展示されました。

東部コミ協地域からは、新津東保育園、新津カトリック幼稚園、新津第二小学校、金沢町なつめろ会はじめ、地域内にある福祉施設の皆さんも参加しました。

新津地域交流センターの展示は、三月五日まで行っておりました、「つるし飾り」を作成して下さった団体等の皆様、ご来場頂いた皆様に感謝を申し上げます。

この事業は、区内に八か所の展示会場を設置して行うとともに、展示期間中は、区バスも「つるし飾り」でデコレーションするなどし、秋葉区全域を対象とした一大イベントとなっております。

この事業は、来年度以降も開催されるものと思いますので、多くの皆さんに「つるし飾り」作りに参加頂くとともに、東部コミ協地域の皆さんには、地域の展示が行われる新津地域交流センターはもちろん、「つるし飾り」でおめかしした区バスを利用して、他地域の展示会場にも足を運んで頂き、秋葉区全地域でこのイベントを盛り上げ、「秋葉区ひな・お宝めぐり」を新しい秋葉区の魅力の一つに育てて頂ければと願っております。

東部コミ協　総務部

●第二小学校の「つるし飾り」

新津地域交流センターには、二小の１年生が作った「つるし飾り」も展示されました。

●制作風景

つるし飾りは、地域のボランティアの方々の指導を受け、１年生、60名で協力しながら、楽しく行う事ができました。

●新津地域交流センターの展示風景

新津地域交流センターには、中央、西部、満日、東部、阿賀浦コミ協地域の作品が展示されました。

その他、荻川コミセン、新関コミセン、金津地区コミセン、小須戸地区ふれあい会館、小須戸まちづくりセンター、区役所・各施設での展示が行われました。

■東部コミ協は、「安全安心な地域社会づくり」「福祉活動の充実」「地域社会の交流」を当面の活動目標としています。

■地域の古紙収集活動で、得られる交付金が、東部コミ協の貴重な活動費の一部となっています。

新津第二小学校と地域が取り組む「新津川の河川愛護」活動について

新津東部コミ協は活動目標のひとつとして「地域社会の交流の活発化」を掲げています。その一例として、新津第二小学校と地域が取り組んでいる「新津川の河川愛護」活動を紹介します。

新津第二小学校では、総合学習の一環として、身近な新津川の環境美化に長年取り組んでいます。今年度、四年生はサケの生態について学習しました。五年生は新潟地域振興局新津地域整備部やガイドの方から新津川の歴史を学び、新潟薬科大学と一緒に水質・生態調査を行いました。また、昨年度にお願いしていた、サケが遡上しやすいように新津川の水位を上げる工事についての経過報告を受けました。

十二月に能代川サケ・マス増殖組合からご提供いただいたサケの卵を学校でふ化させ育てた稚魚を、大きくなって戻ってくるよう願いを込めて、三月初旬に放流しました。

新津東部コミ協はこれからも新津第二小学校の活動を応援していきますので、引き続きご支援をお願いします。

●「サケの稚魚」放流

能代川サケ・マス増殖組合さんから、頂いた600個の受精卵を二小の水槽でふ化させ、子どもたちが育てた約500匹の稚魚と当日、組合さんが用意してくれた稚魚を、新津川へ放流しました。

能代川・新津川と二小とサケと自然とみんなの力と「九十九曲川・石油の町の川」から「サケが遡上する川」へ

東部コミ協
総務部

先日、東部コミ協の事務局に「新津川にサケの稚魚を放流して大丈夫か？」というご意見が寄せられました。

能代川・新津川は、かつて、水害の多い「暴れ川・九十九曲川(くじゅうくまがりがわ)」、かつ、川のあちこちに油が浮く、「石油の町の川」であり、「サケの事を心配する」ご意見があるのも当然かと思います。

しかし、安心してください、今の新津川は、「サケの稚魚」が帰ってくることができる川となっています。

新津川が、どうして「サケが帰ってくる川」になることが出来たのか、その要因は、平成６年から続く、新津第二小学校の「サケの稚魚」の放流活動の中での「二小の児童の想い・行動」にあると思います。

放流を始めた当初は、まだまだ、川の水質も悪く、「サケの遡上」を期待するよりも児童たちが「能代川・新津川の歴史」や「生き物」について「地域を学ぶ・地域で学ぶ・地域の人たちと共に学ぶ」という、その後の「総合学習」としての意義が大きかったのではないかと思っております。

平成20年に、「サケの稚魚」が無事に帰って来るか心配になった児童が、新潟薬科大学にお願いして「水質調査」を行った結果、「川の水は、汚れていてサケは生きていけない」という宣告を受けました。

それでも「サケが帰ってくる」ことをあきらめる事なく、帰ってくるサケのために、川のゴミ拾いを行う「新津川クリーン作戦」を考え実行しました。

この「児童の想い・行動」に、多くの人々が感動し、新津川の美化活動の輪が、徐々に広がり、平成28年には、新津川を遡上するサケの姿が、新津川を管理する県の新津地域整備部によって確認されました。

児童の想いに応え、地域や行政が、力を合わせ行動して、８年で、「サケが遡上する川」となりました。

あの時の児童や地域の人々のようにあきらめずに、さらに様々な「河川愛護」活動を継続していく事で、「多くのサケが帰ってくる新津川」になると信じておりますので、多くの皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

＊「サケが生きていけない川」が「サケが遡上する川」となった経緯や児童が「新津川クリーン作戦」を行う事になった様子をまとめた「作文」など、詳しい資料を秋葉区のホームページの「東部コミ協」の広報誌を紹介している場所にアップしております。

●東部コミ協広報誌検索の方法

1. 秋葉区のホームページにある「ABOUT 区政情報」の所にある『区の取り組み』をクリック。
2. 次に、表示された『コミュニティ協議会』をクリック。
3. 表示された『新津東部コミュニティ協議会』をクリックすると、詳しい資料のPDFを見ることが出来ます。

●平成６年：稚魚の放流開始
●平成20年：水質調査
⇒「サケが生きていけない川」と宣告される。
⇒「新津川クリーン作戦」開始
●平成28年11月：サケの遡上確認

新津東部コミ協だより　ミニかわら版　－令和５年３月15日号－
●発行者：新津東部コミュニティ協議会　●発行人：斎藤　龍秋
●事務局：新潟市秋葉区新津東町1丁目5番12号　新津地区勤労青少年ホーム内　TEL・FAX 0250-23-0780
●編　集：新津東部コミュニティ協議会 総務部　●印　刷：㈱トーヨービジネス

能代川・新津川と二小とサケと自然とみんなの力と「九十九曲川・石油の町の川」から「サケが遡上する川」へ

新津東部コミ協　総務部

能代川は、「九十九曲川」と呼ばれた「暴れ川」で、水害を起こすことの多い川でしたが、昭和58年（1983年）に完成した「河川改修工事」により、分流ができ、市街地を 流れる部分が「新津川」として誕生しました。

水害の危険性は大幅に少なくなり、遊歩道等も整備され新津川は「暴れ川」から、「自然に親しむ川」となる可能性も考えられましたが、地域では、石油の町を流れる川で、ところどころに油が浮いている「油川」として認識されて いました。

そんな中、平成６年（1994年）に新津第二小学校が、環境教育の一環として新津川への「サケの稚魚」の放流をはじめ、その後、平成12年（2000年）から段階的に始まった総合学習では、「地域を学ぶ・地域で学ぶ・地域の人と共に学ぶ」理念のもと、様々な学習を展開しており、その中で、新津川への「サケの稚魚」の放流とそれに不随して、稚魚が元気に帰って来ることを願った「新津川クリーン作戦」が発案され、現在も継続されています。

この「新津川クリーン作戦」の始まりをまとめた作文が、平成20年（2008年）９月に新潟市で開催された「第28回全国豊かな海づくり大会」の作文コンクールで、大会会長賞を受賞し、平成天皇皇后両陛下のご臨席の下、作文を書いた６年生の中静さんが、作文を発表しました。

内容は、サケが無事に戻って来るかを心配した子どもたちが、新潟薬科大学の協力を得て水質調査を行った時に、「サケが戻って来ても生きていけない川」との残酷な宣告をされるが、あきらめることなく「サケの稚魚」のために川をきれいにする「新津川のゴミ拾い」を行う「新津川クリーン作戦」を考え、行う様子をまとめたものです。

１回目が終了した時に、１人の児童がつぶやいた「新津川のゴミはまだなくなっていない。また、ゴミ拾いをしようよ」との言葉に応え、翌年には、第２回を地域の方々も巻き込んで、一緒に行います。

そして、この子どもたちの姿に感動した地域の大人たちが、行政の協力も得ながら、新津第二小学校と共に、新津川の環境改善活動の輪を広げる事で、８年後の平成28年に「サケの遡上」が確認されるまでになりました。

こうした長い二小と地域の「河川愛護」活動が認められ、令和元年（2019年）には、「河川功労者表彰」を受賞することができました。

新津川は「サケが遡上する川」になりました。

●能代川・新津川

・水害を起こす暴れ川
「九十九曲川」（くじゅうくまがりがわ）
・石油を運ぶ、油が浮いた川
「石油の町を流れる川」

●二小の「新津川への取り組み」

・平成６年から「サケの稚魚」放流。
・平成12年からは、「地域を学ぶ・地域で学ぶ・地域の人と共に学ぶ」、総合学習の中で、能代川・新津川をテーマに活動。
・平成20年９月７日「第28回全国豊かな海づくり大会」の作文コンクールで、大会会長賞を二小の児童が受賞した。
・平成19年からは、「新津川水仙物語」と協力し堤防に「スイセンの植樹」を開始。
○平成28年11月「サケの遡上」を確認。
○令和元年（2019年）公益社団法人　日本河川教会の「河川功労者賞」に二小が選出される。

●能代川・新津川への環境整備等の動き

・昭和58年（1983年）の「河川改修工事」により、新津川が誕生。
（水害の危険性が大幅に減少した。）
・新津川「水仙ロード」、「桜を観る会」
・令和３年に新津川「伐木・河床掘削工事」
・令和３年「水位を上げる工事」の実施
児童の手紙により、県が、新津川の水位を上げる工事を行った。
・児童がデザインした「看板」の設置
令和４年（2022年）２月
児童が「きれいな新津川」への想いを込めてデザインした看板が設置された。

新津川を地域の誇りに

第28回 全国豊かな海づくり大会 作文コンクール（小学校高学年の部） 大会会長賞受賞作文

川や海の環境を守るとは

新津第二小学校六年　中静　佳奈

私が学んでいる学校の校区には、「新津川」という一級河川が流れている。

その新津川に、一年前の三月二十六日に、私たち四年生は、となり町五泉市の能代川サケ・マス増殖組合から、サケの稚魚二万尾をいただいて放流した。

四月、私たちは、五年生に進級した。さっそく、総合学習の時間に、サケの生態について調べた。

その結果、サケという魚は川底から水が湧き出るようなきれいな水質の川でないと戻ってきて産卵をしないということが分かった。能代川サケ・マス増殖組合の方が「川の水がよごれていると、サケは戻ってこないよ。」と言ってたのは本当だったのだ。

新津川は、だいじょうぶか、新津川にサケが戻って来るだろうか、心配になってきた。

心配に思ったのは、私だけではなかった。四月の学年集会で、「新津川の水質調査をやろう。」という声が、上がったのだ。私は、すぐに「賛成！」という声を上げた。驚いたことに、「反対！」という人は一人もいなかった。こんなことは初めてのことだ。みんなも放流したサケの稚魚が四年後に新津川に戻ってきてほしいと思っていたのだ。

私たちは、さっそく水質調査のための計画を立てることにした。幸いにも近くに新潟薬科大学がある。大学に協力をお願いすると、「いいですよ。」という返事をいただいた。学生の方からボランティアの申し出もあった。

新津川水質調査は四か月間に及んだ。その結果は、『新津川の水質はとてもよごれていて、サケが戻ってきても生きていけない』という残こくなものであった。

残念だった。しかし、放流した二万尾のサケの稚魚のために、あきらめるわけにはいかない。何とかしなければ…。私たちは、せっぱつまったような気持ちで新津川クリーン作戦に取り組むことを決めた。「新津川のゴミひろい」もその中の一つであった。

「新津川のゴミ拾い」は、十二月二日に行った。雪が舞う寒い日であったが、誰も文句を言う人はいなかった。五年生全員がいっしょうけんめいにゴミを拾い集めた。

二時間後、拾い集めたゴミが山積みとなった。

「すごいゴミの山だ！」

「何でも捨てている。」

「誰が捨てたんだろう。」

私もあまりのゴミの量の多さに驚いた。しかし、しばらくすると、体中におさえきれないほどの怒りが込み上げてきた。しかし、怒りをおさえて、私はかたくちかった。〈私は、川にゴミを捨てるような人にはならないぞ。〉

新津川から拾い集めたごみを全員で手分けして学校に持ち帰った。その途中、ゴミを拾っていた時に、友達がつぶやいた言葉を思い出した。

「新津川のゴミはまだなくなっていない。また、ゴミ拾いをしようよ。」

新年度を迎え、私たちは六年生になった。五月、私たちは、新五年生と力を合わせて第二回目の「新津川ゴミ拾い」を行った。今回は、保護者の方や地域の人たちが二十人くらい参加した。

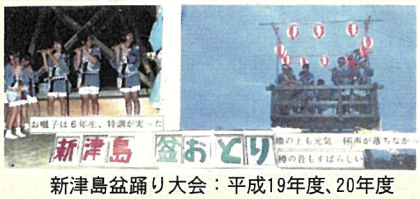
私は、参加者の中に、「子供にまかせておいてよいのか。」と言っているのを聞いた。私たちの取組が地域の人たちの心を動かしたのだ。私はとてもうれしく思った。

新津川は、日本海とつながっている。そして、日本海は、世界の海とつながっている。このつながりは自然のつながりであると同時に命のつながりでもあると考える。私たちは、放流したサケの稚魚が、四年後、新津川に戻ってくることができるように、これからもゴミ拾いを続ける。川や海の自然を守り、そこに住む全ての生物の命を守るために。

●平成20年９月７日　平成天皇皇后両陛下の前で中静さんが発表を行いました。

●残酷な宣言をされても、あきらめずに「川をきれいにする活動」を考え、実行した子どもたちの「熱い想いや行動」が、地域の人や行政も動かし「サケが遡上」する川となった原点なのかなと思っております。

●新津島大盆踊り大会



新津島盆踊り大会：平成19年度、20年度

地域の伝統文化を受け継ぎたいという子どもたちの願いに応える形で開催された「新津島盆踊り大会」。この事業が、東部コミ協「夏祭り」にもつながっています。

●東部コミ協夏祭り

●新津川おかえり☆灯りぷろじぇくと

●二小の総合学習を契機として、新津川が「サケが遡上」する川になったように、地域の歴史・文化を学び、それを大切にしたいという子どもたちの想いに応え、平成19年９月には、「新津島大盆踊り大会」が開催され、平成27年（2015年）には、「東部コミ協夏祭り」の中で、二小の体育館での「盆踊り」が、復活されました。
その後、河川功労者表彰の受賞を受けて、「新津川おかえり☆灯りぷろじぇくと」が、開催されるなど、現在まで、二小と地域との「協働の絆」は、つながっています。